
誰が為に、鐘は鳴る。

井口亮

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

誰が為に、鐘は鳴る。

【Nコード】

N5915Y

【作者名】

井口亮

【あらすじ】

ヨッドヴァフ王国首都グロウリイドーン。その片隅に『冒険者』と呼ばれる人種が集まる店『リバイベル』がある。金貨五枚で人殺しを請け負ってくれるこの店に来客が来た夜、グロウリイドーンの夜に鐘が鳴り響き、『褐色の幽霊』が現れる。

第1章 『最も弱き者』 1

夜空を覆った雲が静かに雨を落とす。

ヨッドヴァフ王国首都グロウリイドーンを静かに霧の中に沈め、路地をふらふらと歩く少女を叩く。

目深に被ったフードの先から水滴がしたり、その水滴の向こうに酒場の明かりが見えた。

酒場の明かりの上に立てかけられた古びた看板にはリバティベルと描かれている。

じんわりと明るい光の中から、雨を抜けて喧噪が柔らかく響く。

雨に追いついてられ人気の無くなった町の静けさの中、その喧噪が妙に暖かく聞こえた。

少女は吸い寄せられるようにリバティベルに入ってゆく。

ドアがキリキリと音を立て、鐘が鳴る。

活気がある、といえば聞こえはいい。

冒険者と呼ばれる人種が集まる酒場は大概がこんなものだ。

響き渡る下卑た笑い声に、カップが打ち合わされる音が混ぜられ反響する。

「リバティベルへようこそ」

店主が力なくそう告げるが少女は目もくれずに店の奥へと歩を進める。

店主はその後ろ姿をほんの少しだけ見つめると、また、黙々と食器を運ぶ作業に戻る。

少女はちらりと後ろを見てその姿を確認すると冒険者の背中にぶつかりながらテーブルの間を縫うように歩く。

少女の纏った汚れた外套は悪臭を放っていたが、冒険者が集まる

店では気にはならない。

むしろ、新品を誇らしげに使っているのは仕事をすれば汚れることを知らない駆け出しの冒険者と見られ、稼げる仕事を斡旋してもらえない。

だが、少女はたまたま着られる服がそれだけしかなかっただけで選んだわけでもなく、また、仕事をもらいに來た冒険者でもない。仕事が無いから泥棒をしにきたのだ。

店の中を素早く見て、獲物になりそうな人間を捜す。

店の奥で強い酒気を放ち、寝ている男が居た。

少女はその男に決めると歩み寄る。

男の腰にぶら下げられた袋を奪うと自分の懐に入れる。

男が僅かに身じろぎし、心臓を掴まれたような悪寒が背筋を走った。

だが、男がそれでも起きることなく寝返りを打つのを見て少女は胸をなで下ろしそそくさとその場を離れる。

怪しまれないように誰かを探す素振りを装い、テーブルの間を抜ける。

店の入り口まであと少しというところで、誰かに襟首を掴まれた。

「誰かを探しているんですかね？」

店主の男だった。

よく見れば、まだ若い。

がしかし、だらしなく曲がった背中と、力なく落ちた肩、どこかとぼけた顔が貧弱な印象を与える。

だけど、自分を片腕で吊り上げる膂力はそれなりに鍛えているものだとわかる。

少女の心臓が早鐘のように鳴り響き、口の奥がからからに乾く。

「少し、待って見た方がいいですよ。うちのお客さんは僕と一緒に

でルーズな人が多いからね」

店主は少女の襟首を掴んだまま、カウンター席に運ぶ。
堅い椅子に半ば無理矢理座らされた少女は、自分のやったことを咎められるのではないかと気が気ではなかった。

「お腹も空いてるでしょう。何か食べていくといい……ラナさん。なんか作ってくださいな」

店主は少女の隣にどっかりと座り込むと、厨房の奥に視線を走らせる。

厨房の奥から不機嫌そうな顔をした女性がパスタの盛られた皿を持って来る。

少女の前に置かれたパスタが湯気を立て、バターの匂いが少女に空腹を思い出させた。

ここ三日、食事にはありついていない。

人の家の瓶に入った水を舐めるように飲む日々で、食事らしい食事をしていなかった少女には安酒場の食事でも凶暴なまでに食欲をそそられた。

危つく手を伸ばしそうになって、店主の方を見てしまう。

「おごりらしいですよ？シャモさんの」

店主の隣に、いつの間にか先程の酔客が座っていた。

「なんでえ、俺のおごりなのかよ」

未だ酔いの抜けきっていない鈍い瞳をじろりと店主に向けて酔客——シャモンはカウンターにだらしく肘をついた。

汚れた金髪に褐色の肌、無精ひげの並ぶ顎の上にけだるげな瞳が

酒気を帯びている。

「そこは、それ、なんだ。あれだ。可哀想な浮浪少女がお腹を空かせてお店に入ってきた。おじちゃん泥棒されていることに気がついてても気がつかないフリをして優しさを世知辛い世の中に伝え たつてのに、スタさんはそこから巻き上げるのかい？」

「あれ？そのお金で何か食べなさいって意味じゃなかったんですか？」

「そういう意味だけど、そこはあれだろ。こう、スタさんが温情かけて黙って何かを差し出すのが粹って奴だろう？」

「こつちも商売ですからねえ」

「商売？商売つつたか？冗談だろ？客に飯作らせて食べてる店主に商売っ気なんかあるわけないだろうに」

店主は面白そうに笑うと Pasta にフォークを伸ばす。

店主——スタイア・イグイットもだらしなくカウンターに肘をつくつくずると音を立てながら Pasta を飲み込んだ。

「まあ、冷めないうちにどうぞ」

先程、ラナ、と呼ばれた女性がカウンターにスープを並べていく。シャモンはそのスープの中に Pasta をくぐらせてくちやくちやくと食べはじめ。

少女はそこで、ようやく、自分が施しを受けたのだと気がついた。

「ふざけんな！」

少女がカウンターを叩き、食器が浮く。

「喰え」

憤る少女の鼻先にフォークをつきつけてシャモンは低く言った。

「……立場を選べるのは強い者の特権だ。弱いモンが何言っただとここで、それがどうしたって言われるだけだ」

そう言っただけで、パスタをまったくちやくちやと食い始める。

少女の鼻頭が熱を持ち、視界を歪ませる。

少女は手づかみでパスタを口に詰め込むと、咀嚼せずに飲み込む。ひたたくるようにシャモンとスタイアのスープを引き寄せると飲み干そうとして熱さに咽せる。

「皿に足が生えて逃げるわけでもあるまいに」

スタイアは苦笑し、背中をさするがその態度が少女の癪にさわった。

詰め込むだけ詰め込むと、ラナが店の奥から冷えた果汁を持って来たのを奪い、一気に嚥下する。

飛び跳ねるように、椅子を降りると少女は店の入り口で鋭く二人を睨みつけて吠えた。

「お礼なんか言わないしお金だって返さないからね！ た、頼んだわけでもないし！」

「辛い目にあってきたのは見ただけでわかる。腹が減ったら来なさい」

スタイアにそう言われて少女はぐつと鼻頭が熱くなったが叫ぶ。

「……っ、ばーか！ ばーか！ もう二度とこんな店来るか！」

ドアについた鐘が激しく鳴り響き、少女は再び雨の中に消えてゆく。

店の中の誰もが気には止めていない。

いや、気に止めている者も居たが声をかけるようなことはしなかった。

喧噪に紛らわせてはいるが、ここに居る誰もが厳しい中で生きている。

それらは決して、人が背負えるものではなく、自分で背負っていかなばならない。

自らの重荷に人の重荷を乗せるのは難しい。

「世知辛いモンですねえ」

何かを代弁するかのようにスタイアはそう呟いた。

ラナが新たに持ってきたエールを傾け、酒気の混じった吐息を落とす。

「……国は栄えたとはいえ、あんな子供が居るつてのはやりきれないですねえ。まだ、親に甘えたい年頃でしょうに」

シャモンは苦虫を噛みつぶしたような顔をした。

「あんまし、背負い込むんじゃねえよ。全部を背負えるだけ、人間の背中つてのは丈夫じゃねえだろ。時折手を貸してはやれるが全部を背負っちゃえば、全部を背負わせようとするのもまた人間の浅ましいところだぜ？」

スタイアは苦笑する。

「僕が子供の頃は奴隷制度つてのが残ってましたよね。あれはあ

れで酷いものなんだけど……それでも生きていくだけならいいものだっただけでしょうねえ」

「解放した奴隷の受け入れ先が無いから冒険者制度なんてモンをつくったんだろう？魔物の被害が多くなったのもあったから、働く場所が無い連中に組合はおるか騎士団、教会、王立大学、国の専門機関が広く技術を解放してその対策に当たらせる」

「大人はいいですよ。いくらでも働ける。だけど、いつだって時代のあおりを喰うのは子供達なんですよ」

スタイアはそれだけ言うと、席を立ちエプロンを付ける。

「なんだよ。もう終わりかよ。付き合わないのか？」

「野郎と二人雁首揃えて飲んでも面白くないでしょうに。仕事しますよ仕事」

「ウエストグローリイロードの裏通りに新しいランパブができてな？ジェリカちゃんって娘がいいおっぱいしてんだよ。おごるぜ？」

「わかりましたよ。揉みに……じゃなかった揉みにいきましようか」

付けたエプロンをカウンターに掛けて店を出ようとするスタイアにラナが黙って袋を投げつけた。

後頭部に重い音を立てて当たった袋は地面に落ちて、銅貨を床にいくつかばらまいた。

「わおう。そっぴやシャモさんお金全部あげたんだっけ？」

「しまった！お釣り貰っておくべきだった！」

ラナは大きな溜息でもって返した。

第1章 『最も弱き者』 2

ヨッドヴァフ王国。

ヨルゲン大陸の東側に位置し北にアブルハイマン山脈、東に大海洋、南にヨシユ砂漠、西にコルカtas大樹林が存在する。

他国の侵略を受けづらい地形に守られ、広い領土を有する国で主に外洋を通じて他国との通商を行い、発展を遂げてきた。

比較的温暖な気候であり、農牧が盛んな平原地帯を含め、鉱物資源をアブルハイマンに求めることができ、豊かな国力を誇っていた。通常、他国からの侵略を受けづらい国家というのは発展しづらい。戦争は国力を疲弊させるが技術を発展させる。

国民は他国に侵略される危機感に国の軍備拡張と技術発展を許すが、平時においてはまずその生活を豊かにすることを望む。

ヨッドヴァフ王国が国同士の戦争をすることなく大国となったのには理由がある。

魔物の存在だ。

コルカtas大樹林の奥に存在する秘境やアブルハイマン山脈の奥にある『秘境』と呼ばれる未踏の地で独自の進化を遂げた動物達。これらは既知の動物らより遙かに高度な身体能力と知能を持ち、その生息域を人里に近い場所まで広げてきた。

この魔物の被害を食い止める為にヨッドヴァフ王国は軍隊を持たなければならなかったのだ。

「とはいえ、王都の騎士団ともなると暇なモンですよね」

正午の鐘が鳴って、まだ間もない時間である。

ヨッドヴァフ王国首都グロウリイドンの第七騎士団詰め所の騎士団長執務室のソファの上でスタイアは欠伸をした。

「なら、一つ、スタさんが部隊を率いて魔物討伐に行ってくれと助かるんだけどね？」

アーリツシュ・カーマインは騎士団に要請された任務を優先度順に選り分け、どの部隊を当たらせるかを一通り起案したものを羽ペンで海草紙に書き記すと欠伸をかみ殺すスタイアに苦笑した。

長い黒髪の上に、鋭い瞳を持つ凜々しい青年である。

職務中にも銀色の甲冑を着込む生真面目さは、隣で鎖で編んだ鎧下だけを無造作に着込んでいるスタイアとは正反対の印象を与える。

「嫌ですよ。それに、僕は準騎士ですよ？まさかよもや正規の騎士さん達を僕なんかが率いたら怒られちゃうじゃないですか」

「階級に拘るのは平時だからだよ。戦場に立てば本当に必要なのは勝つための力だけだということをみんな知ることになる。必要なら正騎士への申請をしておくが？」

「アっちゃんも酷いですねえ。正騎士になると途端に色々面倒な仕事が増えるんですよ？その上給料も殆ど準騎士と同じ。昇進したがる人の気がしれないですよ」

「準騎士はいつだって解雇できるんだ。それに、戦場に立てば真っ先に先陣を任されるのも準騎士。それはそれで楽しいさ」

スタイアはアーリツシュのしたためた書状を受け取ると、中身をチェックする。

「今が楽なら、それでいいじゃないですか」

ろくすっぽ中身を見ずに書類を返し、スタイアはまた欠伸をした。

「あなたがそのような態度だから、騎士の規律が乱れるんです」

騎士長室のドアが開き、厳しい叱責がスタイアに投げられた。

「おんや、フィルさんじゃないですか。一発やりませんか？」

「どこの国の挨拶ですか。恥を知りなさい」

スタイアが締まりの無い顔に喜色を浮かべて身を乗り出す。

フィルローラはそんなスタイアを見下すようにして鼻を鳴らした。膝の裏まで伸びた綺麗なブロンド、芯の通った目鼻筋、不機嫌に歪められてこそいるがヨツドヴァフでは指折り数えた方が早い美人だ。

教会司祭の僧衣を纏い、清楚な佇まいの芯に強さを見せる魅力を持っている。

「珍しい。来ないようだったら教会まで見に行こうかと思つてたところでしたよ。ふっふふ」

「私は見世物じゃありません。用も無いのに教会まで来られても困ります」

「いやいや、美人という神に信仰を捧げるのは立派な用件だと思いますよ？親となり、子を作り、その巡り会いを作られた神の奇跡に感謝する。どうです？一発やりたくなりませんか？」

「そんなことだから、いつまでたっても入門を許されない平信者なのです」

「だって教会の戒律ってしちめんどくさいじゃないですか」

肩で笑うスタイアにフィルローラは溜息をつく。

「して……どうしてまたこんなところに」

「いえ、教会と騎士団で合同調整中の案件についてですがタグザ隊とシルヴィア隊のいずれかを編入させたいと思いますして。アーリッシュ騎士団長のご意向を伺いに来ました」

「結論はどちらでもいい。がしかし、スタさん。あえて聞くけど、スタさんならどっちの部隊を入れる？」

「入れるつつたつて、どっちもおっぱい小さいし、僕らから比べれば子供じゃないですか。入れるに入れられませんか」

スタイアが面倒くさそうに答えると、また、騎士長室の扉が開き、物々しい騎士装束を纏った少女が現れた。

「胸の大きさと腕の善し悪しとは関係なかるうがっ！」

開口一番怒鳴りつけたのは褐色の肌に金色の髪をなびかせた聖堂騎士のタグザだ。

「おわあ！居たなら居たと言えばいいのに。全くわかりませんでしたよ。まるで、あなたのおっぱいと同じくらいわかりませんでした」

「甲冑のせいで判らないだけだっ！きちんとあるべきところにある！眼を開いて良く見てみるがいいっ！」

「神は言った。『正しき姿は見ようとするとする者には見えない。真に正しき姿は常に己の胸にのみぞある』」

神妙に告げるスタイアに今にも斬りかかりそうなタグザの肩を引き、氣勢を削いだのはその後ろに立っていた少女だった。

「……相変わらずですね。スタイア隊長」

「うっわ、ちっぱい二号も居たんですか」

ちっぱい二号と呼ばれた少女は怒ること無く小さく会釈する。

「この度、騎士団並びに聖堂騎士の業務統合に派遣されました。

シルヴィア分隊長長のシルヴィア・ラパットとタグザ・ウィンブルグです」

シルヴィアは緩やかに毛先の巻かれた金髪と白い肌の美少女ではある。

だが、どこか暗い瞳が冷たさを感じさせる。

「なにになに？なんでこの二人が来てるんですか？アっちゃん、僕聞いてないですよ？」

「言ってないからな」

アーリツシュは屈託なく笑うと、傳く二人に笑みを向けた。

「バルツホルドの戦い以来の聖堂騎士の勇士が今回の業務統合に加わってくれるとは頼もしい。早速だが、我が第七騎士団は現在、組織的な奴隷商の実態を把握しこれを壊滅せんとしている。奴隷の保有はいかなる理由があっても律法は許してはいない。また、君らが信仰する神も人が人を隷属させることを許してはいない。これらを滅する為に力を貸してはくれないか？」

「タグザ隊が」

タグザが前に進み出た。

「任せる。ダーツ正騎士長の指揮下に入り、委細を受けてくれ」

心得たばかりにタグザが会心の笑みを浮かべる。

一人話題に取り残された形となったスタイアは二人の顔を交互に見つめる。

「ねえねえアっちゃん。どういうことだい？」

「騎士団と教会の保有する聖堂騎士は指揮系統こそ、それぞれ国王直下と教会と異なるけどその業務については重複するものが多い。だから統合しようという話があつてね。試験的に聖堂騎士の受け入れを第三騎士団と第七騎士団で行うことになったんだ」

「へえ、そうなんだ。聖堂騎士って女の子多いから楽しみだねえ。どおれ、どの子から手をつけようかなあ。へっへっへ」

「そうもいつてられない。既存の部隊との業務割り振りやら編入手続きで忙しくなる。それらをやりやすくするため彼女らの階級は聖堂騎士のそれをそのまま準用するから士長扱いになることが決まっているんだが」

「げげ」

タグザが得意げな顔でスタイアを見下す。

「そういうことだ。口の利き方に気をつけたまえ。準騎士殿、私はここでは士長扱いになる。準騎士と士長では間に準騎士長、正騎士と二つ階級が違うことになる。次に私を侮辱しようものなら縛り首にしてやるからな？」

アーリツシュは苦笑し、シルヴィアに向き直った。

「シルヴィア隊は予備役として市街巡回の任についてもらうが騎士団と聖堂騎士では勝手が違うだろう。その暇そうな奴を使ってくれ」

ソファから飛び起きてスタイアが驚く。

「ひつど！アっちゃんと僕の仲じゃないか！もちつと楽しさせてくださいよ」

「だめです」

その襟首を掴んだのはシルヴィアだった。

「どうせ言われなければ働かないような人なんですから、馬車馬のように使ってやりたいと思います」

フィルローラがくすくすと笑った。

「いい気味です。これを機に勤勉に国家国民の為に奉仕するといふ騎士の大義を思い出すべきです。そうすれば神もきつとあなたの信仰心をお認めになりますわ」

アーリツシュはいたずらめいた笑みを浮かべて告げた。

「シルヴィア君、さっそくその穀潰しを連れて市街巡回に行ってくれ」

「了解しました」

「いや、ちょ、僕はこれから新しく来る聖堂騎士団からスタイル……じゃない、筋のいい子をみつくるってベッドの上で剣術指南するという重要な任務が……」

「そうですか、ならば、スタイア隊長の剣術の手ほどきをまず、隊長の私が受けてこそ他の部隊員にも示しがつくというものですね。稽古場でもベッドの上でもどちらでも倒れるまで相手をしてください」

「流石に僕もちっぱいは……」

ぐだぐだと言いつにすらなっていない言い訳を述べるスタイアの首根っこを引っ張りシルヴィアが騎士団長執務室を後にする。

「……忙しくなりそうだな」

「でも、聖騎士と騎士団がその業務を分担できれば治安維持を図る上での足りない人手についての問題は解決します」

「騎士団の権益を侵されることにより、聖堂騎士との大なり小なり衝突は起こる。今のがいい例だ」

眉を潜めるアーリツシュにフィルローラは訝しむ。

「アーリツシュ卿は業務統合について反対なのですか？」

「大いに賛成だ。だからこそ第七騎士団で引き受けた。がしかし、問題はそこじゃあない」

苦笑し、懊悩を仕舞い込むスタイアにフィルローラは一抹の不安を覚える。

「どういったことに心を悩ませていらっしゃるのでしょうか？よろしければお聞かせ願えますか？」

「この国は多くの問題を抱えている。奴隷解放戦役を経て未だ解決されない奴隷問題、広がりすぎてそれが当たり前となっている貧富の格差。それらが作る階級意識が産む差別。今はそれでも不満無くやっていける。がしかし、国家百年を案じた時、それらは全て国を停滞させ、不利益しかもたらさない」

書類に署名を終えたスタイアは一息つくとも頭を押さえて溜息をついた。

「……こういう考え方は危険かな？」

「神意に悖れば危ういですが、真に民草のことを思っただけなら、それは間違いは無いかと」

「強く、あれ、それが騎士也、か」

スタイアの苦笑はどこか悔しそうだった。

「どなたの言葉ですか？」

「スタイアの言葉だ。続きがあつてね。精神的に打たれ強ければ大概のことはどうにかなるから、どうでもいい。シンプルでわかりやすいから僕も良く使うようになってしまったんだ。彼の中じゃあ、世の中はそのくらいシンプルなんだろうさ」

「まあ」

フィルローラが驚く。

「まったく。信じられません。あの人は騎士としての秩序をないがしろにしています。ヨッドヴァフの栄えある騎士団の一員としての誇りを持つて戴きたいものです」

アーリツシュは小さく、だが、はっきりと告げた。

「秩序があるから守るのではない。守るべきものがあるから規律があり、秩序が生まれる。それを正しく知り、そして行える騎士は果たして何人居るのだろうか」

「え？」

「彼の名誉は僕の名誉でもある。僕の親友の悪口を頼むから彼の居ない場所で僕に言わないで欲しい」

第1章 『最も弱き者』 3

グロウリイドーンは中央にグロウリイハイムを置き、東西南北に主要道路であるグロウリイロードが延びる。

北に工業区、東に住宅街、南に繁華街、西に商業区と区分けされ、それらを高い城壁が囲う形となっている。

城壁内部はひしめき合うように立てられた石材の建物の間を石を敷き詰めて造られた道が縦横に走り、主要道であるグロウリイロードに通じる。

ヨッドヴァフ首都が遷都する際に、区画整備され計画的に作られたことから大きくこの形を取ることとなり、それは今でも変わらない。

「だけど、その後に首都に住むことになった人は城壁の外に住むしかなかったんだよねえ」

城壁の外にはいわゆる貧民街が広がっており、人の靴の底が作った道と木材で組まれたあばら屋が乱立していた。

スタイアとシルヴィアは貧民街に軒先を並べるマーケットを歩いていた。

「……聞いていた巡回経路と違うようですが」

首都に集まる人間でこった返す人混みは城壁内の繁華街の比ではない。

油断すれば帯皮に吊り下げた武器すら奪われそんな人の波だ。

「城壁の中なんか歩いてたって退屈でしょう?……騎士が本当に歩かなきゃならないのはいつだって外さ」

スタイアは人混みの中を楽しそうに歩いている。

「お高くとまった庭園の花より、気高く咲く野原の花の方が綺麗な場合も多々あるわけでした……可愛い子、結構いるんだなあこれが」

シルヴィアはスタイアの半歩後ろを歩きながら曲がった背中を見ていた。

「相変わらずですね」

「君もね。聖堂騎士の中ではタグザちゃんと二人、頑張ってるそうじゃないか。ユロさんから話は聞くよ」

「墓守のユーロからですか」

「信用に足る男ですよ。人は見かけによらないんだ」

「私は隊長に教えていただいたとおりのことを忠実に実践しているからです」

スタイアは渋い顔をする。

「シルちゃんは相変わらず堅苦しいねえ。もう一人のちっばいみたく多少、性格を柔らかくした方がいい。それじゃあ、おっばいと一緒に潰れちゃうよ」

「それでも大分、柔らかくなったツモリなんですが」

「おっばい？性格？」

「両方」

スタイアはクツクツと笑うが、シルヴィアは笑わなかった。シルヴィアは揺れる肩を見ながら目を細める。

「スタイア隊長はどうして、正騎士の地位を捨てたんですか？」

シルヴィアの生真面目な瞳がスタイアの背中に刺さった。

「本来、アーリツシュ騎士団長の場所に居るのはスタイア隊長であつてもおかしくはないはずです。アーリツシュ騎士団長もそれを望んでいるはずです」

スタイアは苦笑を浮かべる。

「冗談でしょう？ 僕みたいなのが上に立てば規律もクソもあつたもんじゃない。正騎士になつて女の子とのいさかいを起こせば場合によつちやその場で打ち首ですよ。おっかなくてなれたモンじゃない」

「スタイア隊長はそのような無駄なことはしない人です。私も無駄な質問をして時間を無駄にはしたくはないツモリで聞いています」

切り込むように尋ねるシルヴィアにスタイアは黙る。

僅かな沈黙の後、スタイアはもう一度苦笑を浮かべた。

「人の生き方を知ろうとすることはいいことだ。だが、君は誰かに誇らしげに語れる生き方をしていると胸を張れるかい？」

シルヴィアは難しい顔をして俯く。

「……申し訳、ありません。だけど、私には納得がいきません。私はスタイア隊長の指揮下でバルツホルドを戦い抜きました。そのバルツホルドの戦いの真の功労者が何故……」

「そんなことより、仕事でもしましうか」

スタイアはすつと目を細めて、路地の先を見つめていた。
ぼろを纏った子供が露店の軒先から金貨を入れる籠を引ったくつていた。

「またお前かつ！この泥棒猫めっ！」

店主が怒声を上げてぼろを掴み、地面に引きずり倒すと棒を手にして激しく叩いた。

跳ね上がったぼろの中から転がり出てきたのは小さな少女だった。

「ぎゃうっ！」

悲鳴に通行人の興味が一時、そちらに注がれる。

少女は悲鳴をあげながらも、籠を奪い返される前にその中の金貨を自分の口に押し込み嚥下した。

「飲み込みやがったな！吐けっ！吐けっ！」

通行人が一様に興味を失う。

シルヴィアにもその場の雰囲気だけでそれが恒常的に貧民街で見られる風景であるということを察することができた。

「あいよー、ちょっとどいてねー」

スタイアは人混みをかき分けてすると露店の前まで近づく。

「吐けと言っているだろうが！」

見せしめ、という意味もある。

店主は怒り狂った形相で少女の腹を蹴飛ばしていた。

「騎士団ですよ。状況は見ていました。あとはこっちで引き受けますが……おんやぁ？」

足下で許しを請うように平伏し、震える少女にスタイアは見覚えがあった。

「あ……」

先日、店に来た泥棒の少女だ。

「ダメだダメだ！許せばこいつらはつけあがる！もう二度と盗みを働けないように指の骨を今ここで折ってやる！」

「律法の手続きを経ない私人の懲罰は、またそれも律法の裁きを受ける行為になります。今すぐその少女の身柄を引き渡しなさい」

遅れてやってきたシルヴィアが高圧的に店主を威圧した。

「こっちは喰うか喰わねえかの商売やってんだ！壁の中の人間に関係あるかってんだ！」

憤った店主が棒を力一杯振り下ろす。

「どつかで見た顔だと思ったら——痛あつ！」

少女の顔を覗き込もうとしたスタイアの頭に棒が振り下ろされ、鈍い音が響く。

激しく叩かれたスタイアの頭が地面の上で跳ねる。
流石に、騎士に手を挙げたとなって店主が青ざめた。

「え、あ！だ、大丈夫か？」

「つあああ……頭が割れるように痛い」

店主がスタイアを抱え起こす。

「騎士に手を挙げるつもりはなかったんだ。ほ、本当だ！信じてくれ！申し訳ない」

「いあいあ、今は僕が悪い。この子、どうかで見たことがある
と思ってる。僕の知ってる子なんだ」

スタイアはじつとりと脂汗の浮かんだ顔で苦笑した。

「騎士のお知り合い？なんでまた泥棒なんか」

「一度会っただけだね。まあ、旦那さんくらいの年になればわかるでしょ？」

少女は怯えたままスタイアと店主を交互に見る。

一瞬、スタイアが目を細めて少女を見つめるが、すぐに店主に向き直る。

「まあ、旦那さん。商売つてのは一つ盗られりゃ、十売らないと元が取れない。その年じゃあ、同じくらいのお子さんも居るでしょう？何度も盗られりゃ怒る気持ちは判りますが、どうか騎士団の顔も立ててやっちゃんくれませんかね？」

店主は少女とスタイアを交互に見比べて渋い顔をする。

その一瞬を好機と取ったのか少女が地面から跳ね上がるように飛んで人混みを割って逃げて行く。

「あ、こらっ！」

店主が追いかけようとスタイアがそれを手で制す。
懷から金貨を手に取り店主に握らせる。

店主は手の中に握った金貨とスタイアの顔を交互に見比べて困った顔をした。

スタイアは起き上がるとズボンについた埃を払うと僅かに首を振って苦笑だけを残す。

店主はただ黙って、小さく会釈して店の奥に引込んだ。
シルヴィアはそれだけで自分の不手際に悔しさを覚えた。
そそくさとその場を離れるスタイアの後ろに小走りで追いつき、

頭を下げる。

「……申し訳ありません。私が余計な事を言っただけに」

——店主がどういった生活を営んでいるのか、少女が一体どんな生活をしているのか。

片方に偏った物の見方で発した言葉が、店主を怒らせた。
スタイアは曲がった背中越しに苦笑してみせた。

「まんずまず、騎士つてのは痛い商売だから嫌いなんですよ」
「ヘルムの着装義務を守らないからです」

第1章 『最も弱き者』 4

少女は貧民街の裏通りを右に左にと走る。

叩かれた足が酷く痛む。

泥棒を見つけたらまず足を叩け。

商売をする者なら必ず耳にする逃走防止の為の格言を忠実に守られ、少女の足は真つ赤に腫れ上がっていた。

それでも逃げなければならぬ。

騎士団が下す盗みを働いた者へ科せられる刑罰は、片耳を釘で柱へと打ち付ける。

二度までは耳を引きちぎってその場を立ち去れ、三度目は打ち付ける耳が無いから縛り首となる。

今まで、捕まっても店主から激しい打擲を受けるだけで、騎士団に捕まったことは無い。

そもそも、貧民街まで出てくる騎士が居ることの方が珍しい。

貧民街に騎士が出張るのは壁の内側に貧民街を根城とする組織的な盗賊集団を壊滅させる時くらいなのだ。

時折背後を伺い、追われていないかを確認する。

その姿が見えないからといって安心していいものではない。

泥棒が徒党を組んでいる場合、騎士の中には逃げる泥棒を仲間の元まで逃がす場合もある。

その類では無いだろうが、どちらにせよ捕まる訳にはいかなかった。

路地から路地を抜け、ひたすら走り下水道へ向かう。

首都の地下に張り巡らされた下水道は一つの迷路となっており、少女のような不法の輩が逃げ込むのには格好の場所だった。

排水を遡って逃げ込めばそこまでは誰も追ってこない。

城壁から排水路に勢いよく吐き出される下水をみつけ、排水口に駆け上がる。

排水口の縁を掴み排水口の鉄格子に飛ぶと、小さな体を鉄格子に滑り込ませる。

糞尿のきつい匂いのする排水が鼻から入るが、必死に目を閉じ、泳ぎ、下水道脇の整備路に捕まる。

汚水を吸い、重くなったボ口を捨て疲れた足取りでよろよろと歩く。

背中や足の傷口に汚水が染みてひりひりと痛む。

怪我をしている時に排水を浴びると傷が紫になってとても痛くなるということを聞いたことがある。

どこかで、汚れを落とさなければいけない。

荒くなった息を整えようとして、鼻に入った水が喉を焼いて咽せた。

酸欠で霞む頭に汚臭を含んだ大気を一杯に送り、それでも地上へ出る為の梯子を掴む。

東の貴族街までいけば噴水がある。

そこに飛び込んで、ざっと汚れを落としたらまた逃げればいい。そう考えながら、下水道の上げ蓋を開けた。

「ほいつかまえた」

首根っこを掴まれ引きずりあげられた。

「あ」

声にならない声を上げて、少女は自分を掴み上げた人間を見る。片手で軽々と持ち上げているのは、先程の騎士——スタイアだった。

「このっ！離せっ！離せようっ！」

「わ、わ！ばっちい！暴れなさんな！」

少女はスタイアの腕に力一杯かみつくが、堅い腕の表皮に僅かに歯が食い込むだけなのに驚いた。

暴れる少女から飛んだ汚水を思いつき顔に被ったスタイアは染みる目を抑えながら、少女を地面に降ろす。

「店主とは話をつけてきましたよ。全く、無茶な逃げ方をするもんですね。どれ」

「わ！変態！何する気だ！体売る気はないぞっ！」

「舐めても小便の味しかない子供には興味ないからどうぞお構いなく」

少女が嫌がるのにも構わず、服を捲るスタイア。

少女の背中^の表皮が破け、そこから血が滲んでいるのを見て思わず眉を潜めた。

「……破傷風が怖いですね。うちに来なさい」

「二度と行かないって言っただろ！」

「なら、選^びなさい。騎士団で律法の裁きを受けるか、僕に従^うか。シャモさんが言ったように、強い奴だけが与えることを選^べるんですよ」

スタイアは少女を黙らせると、帯皮に吊した畳まれた外套を広げ少女に被せた。

騎士が雨天時の巡回に使う綿でできた外套で、所属する騎士団の紋章が刺繍されており買おうとするとそれなりに値段のするものである。

汚水が染みこむのを全く気にせずスタイアはそれをすっぽりと被せたのだ。

「ようやく、追いつきました」

がちゃがちゃと重い鎧を鳴らし、シルヴィアが追いつく。
荒い息を整えながら生真面目な瞳をぶつけてくるシルヴィアに少女は身を縮める。

「騎士団に連れて行くのですか？」

「このままじゃばつちいからね。うちの店で風呂に入れますよ」

スタイアはそう言って少女の手を引く。

「……その後はどうなさるおつもりですか？」

「さて、どうしましょうかね」

「騎士団では少女といえ律法の裁きを受けます。教会で保護するのが最善の策と思います」

スタイアは歩きながら揺れる。

「だろうねえ。王国律法は事情があつたとしても容赦なく裁いやうからねえ。教会主導の聖堂騎士が扱えば情状にあわせた酌量つても図ってくれるしねえ。アっちゃんもそれを考えて聖堂騎士との業務統合を受け入れたんだろっねえ」

「……わかつてらしたんですか？」

「騎士団つてのは男社会です。でも、世の中には優秀な女性も多い。がしかし、優秀な女性が台頭するのを好ましく思わない人達も居る。比較、女性が多く登用されている聖堂騎士が騎士団と混ざれば契機にはなる、という見方もできますしねえ？」

シルヴィアは黙った。

——スタイアの言ったそれが騎士団と聖堂騎士の業務統合の本当

の目的だからだ。

だが、それでもシルヴィアは騎士団が手を伸ばせない領域で誰かを助けたいと思えるだけの若さを持っていた。

「寄る辺なき者に対して、教会は寛大です。その少女は我々が保護します」

「教会で保護して、シルちゃんがずっと面倒を見てくれるんですかね？」

スタイアはどこか底冷えするような声で呟いた。

「え？」

「罪を犯す少女を騎士団と合同で聖堂騎士が保護し、更正に導く。確かに、それは美談となりますし、それが望む形ではあるんですけど、それが最も望ましい。シルちゃんが使命感に燃えるのもよく理解はできる。応援も手助けもしてくるでしょう。ただ、果たしてそれが正解かどうか。間違いだったときに君は責任を取れるんですかね」

少女は自分の手を引く騎士の中に恐れを感じさせる何かを見つけた。

シルヴィアは自分の考えのどこが間違っているのかを考えている間に、その答えをつきつけられた。

「三日後には教会からこの子は居なくなってますよ」

突きつけられた結論に、シルヴィアは納得しかできなかった。教会は保護し、修道院で自立できるまでの生活と教育は面倒を見る。

ただ、望んで抜け出す人間を追うことまではしない。

がしかし、シルヴィアが僅かに見ただけでもこの少女の逃走の仕方は異常だった。

執念、といえるようなものを持っている。

「強い人間は選ぶことができる。それくらいには強い子ですよ。この子は」

少女は汚水でぬめる手を強く握る騎士の手の大きさに初めて気がつき目頭が熱くなった。

シルヴィアは自分が聖堂騎士であり誰かを救える立場にあり、その本質を見抜けなかった未熟さに唇を噛んだ。

「……私は、また間違っていたんですね」

「間違えるのは誰だっと思っていることだし、この子も間違えてる。僕のこと果たして正しいのかと問われれば正しいとは言えない」

少女は黙って、スタイアの言葉に耳を傾けていた。

「スタイア隊長。では、何が正しいのですか？」

「知らないよ。ただ、でも、規律も秩序も人が作ったものならば、その人をないがしろにしちゃあいけないと僕は思うだけですから」

シルヴィアは立ち止まると、小さく一礼した。

「……もう一度、あなたの下で学ばせてください」

「嫌ですよ面倒臭い……それに、いつまでも誰かにすがって生きていける訳ではないでしょう？ 何度も失敗して自分で覚えて行けばいいですよ」

スタイアは苦笑すると遠くにリバイベルの看板を見つける。

少女が顔を上げると、シルヴィアはどこか優しげな笑みで少女を見ていた。

「シルちゃん、申し訳ないけどアっちゃんに寄り道してから帰るって言うておいてくんないかな。帰るってあれだよ？騎士団に帰るって意味じゃないからね？」

「サボり了解」

第1章 『最も弱き者』 5

公衆浴場ではなく風呂という設備を設けている場所は一部の貴族を除いて、そう多くあるわけではない。

高級宿や人気のある安宿に備え付けてある場合もあるが、公衆浴場での湯浴みが庶民としては一般的であり、そうそうお目にかかれるものではなかった。

そういった意味で、リバティベルはヨッドヴァフ中を探して唯一、風呂場を持つている酒場となる。

元来は向かいの宿屋『海洋亭』が客室を拡張する際に一階部分の食堂を取り壊し、食堂を別棟としてはじめたのがリバティベルの始まりであり、今でも続く慣習である。

海洋亭には増設できる場所が無いことから、リバティベルの裏に浴場を作った為に酒場でありながら風呂を持つという経緯に至る。

とはいえ、四方を板で囲い、石材を並べて作った浴槽に湯を張るだけの簡素な代物だ。

店主が趣味で並べた植木がいささか他の公衆浴場と違い、屋外で風呂に入っているような趣にさせるが、仕切りの向こうに見える外壁が景観を著しく悪くしていた。

湯が張られたばかりの浴室で、ラナは黙って少女の体を洗っていた。

少女の体にはいくつもの傷があり、そのうちいくつかは黒ずんだ跡になっているものがあつた。

少女はラナを警戒しながらも、されるがままに体を洗わせているうちに、ラナがとても丁寧に体を洗ってくれることに気がつき、気を許した。

張り詰めていた緊張の糸が解け、痛みと眠さが意識の中でよみかえる。

「ねえ……」

おずおずと漏らした吐息に乗せた言葉が喉の奥にからみつく。

「……本当は嫌じゃないの？」

「何が」

「あたし……くさいから」

「くだらない」

「……あたし、牢屋に入るのかな？」

「そんなことはしないと思う」

「なんで？人のもの盗んだのに？」

「まっとうな泥棒には手ひどいことはしないわ。スタイアは」

スタイアの振る舞いは、少女を騎士団に連れて行くことはしないだろうと確信させるものがあつた。

少女の頭に湯を被せ、熱いタオルで顔を拭いてやりながらラナは考える。

この少女は、とても聡明なのかもしれない。

自分のしていることが社会的に悪いことであることを認識している。

まともな教育を受けられない中で、自分の行為が悪いと認識できるのは相手がどのような被害を被るか想像できるからだ。

——盗まれた相手が困るということを十分に理解しているのだ。

追い詰められた人間というのは自分の事で精一杯になる。

飢えと寒さに迫られる毎日の中、生きる糧を奪った相手の痛みを共感できるというのは易しいことではない。

ラナはしばらくしてから、言葉を継いだ。

「疲れたでしょう？」

無遠慮に頬を押し上げるタオルに瞼を細め、少女は湯と違う物が零れるのを隠した。

少女はそれでも必至に肩に力を入れてか細く応える。

「あたしより、辛い子もいるもん」

ラナは眉を潜めてほんの少し、考えた。

「……誰か、助けたい人が居るの？」

少女はタオル越しにラナの手のひらに鼻を押しつけ、小さく頷いた。

「……一緒に暮らしてた子。名前は無い」

名前が無いのは親が居ないからだ。

親が居ない子供は往々にして孤児院に引き取られるか、奴隷として誰かに売られるか。

そのいずれにも当てはまらない場合、浮浪児として生きていく為に盗みを働く。

盗みを働く子供達の間では、捕まった時に仲間の名前を言わないように名前が無いままにしているのだ。

いや、当然のように呼び合うための名前はある。

だが、それは決して誰かに知られることはなく、墓に彫られることもない。

それが、彼女やその周りの人間の当たり前なのだ。

「人さらいに捕まって、売られちゃった。お金、持っていけばかえしてくれるって言ってた」

ラナはそれでようやく合点がいった。

非公然だが泥棒にも秩序がある。

金を持つている相手から、自分が困らない分だけ盗む。

貧しい時代を経験しているヨッドヴァフの住人はそれくらいであれば許容する。

それを越えて大きく仕事をする、スタイアのような騎士もその取締を厳しくするし、なにより、それで飢える者もでてくるからだ。そうになると、同業者からも相手にされなくなる。

当然、少女もその理を知らない訳が無く、少女の体に残る傷跡にはその理を無視した証拠である。

「その子は、もう、戻らない」

ラナは言い切った。

少女が驚き、ラナを見上げる。

「あなたが買い戻すまでに、その子は奴隷として生きていかなくちやならない。安い額ではないのなら、その子は奴隷として生きていく方法を覚えてしまう。あなたが買い戻して自由にしてあげても、染みついた生き方は変えられない」

少女は緩みかけた心の糸を張り直して、顔を背けた。

「それでも、やるもん！」

「できるわけない。奴隷一人の値段がどれくらいのものか知っている？」

「……金貨二千枚、いくつか数えられないけど、たくさんだって話は知ってる」

それは明らかな嘘である。

金貨一枚あれば贅沢をしなければ一月は生きていける額である。
金貨二千枚とは貴族の邸宅が造れるくらいの値段である。
だが、しかし、彼女にはそれが全てだった。

「今、どれくらい持つてる？」

「金貨一枚……今日盗んだものだけど……」

「諦めなさい。それが嫌なら、頑張りなさい」

ラナは淡々と応えた。

ラナが言ったことは事実の一つではある。

しかし、買い戻すと決めた少女の代わりに金を出せる訳ではないし、出してはいけない。

そして、その現実は一層厳しくてもやると決めた人間にしかできないことであることをラナは知っていた。

少女はラナの手から逃げるように浴室を出ると一人で体を拭いて新しいシャツに身を包んだ。

第1章 『最も弱き者』 6

「んー、可愛いな」

「ほら、やっぱり可愛いでしょ？」

リバティベルのカウンターでごろつくスタイアとシャモンは風呂から上がり、服装を整えた少女を見てエールの杯を傾けていた。

今まで一度も可愛いと言われたことの無い少女は、赤くなって俯く。

「最初見た時は泥臭いガキだと思ったけど、風呂入れば変わるモンだな」

「泥被って髪もばさばさだからわからなかったでしょうけど、目鼻筋も整ってるいい線いくんじゃないかなーとずっと思ってたんですよ」

「これはこれでなかなかそるモンがあるじゃないか」

「でっしょう？たまにゃーロリータ趣味も悪くないでしょう？」

「でもよースタさん。ロリって実際どうなんだ？ぶっちゃけ入らないだろ？」

「そりゃあ、そうでしょう。むしろ入っちゃったら逆に僕らのも子供サイズってことになっちゃうからそれはそれで哀愁をびんびんに感じちゃいますよ」

「そっか、感じちゃうのか。びんびんに」

「感じちゃうんです。びんびんに」

既に大分酔いが回ってきているスタイアとシャモンは一斉にげらと笑い出した。

下品に笑う男達を少女が怪訝そうに見つめる中、ラナは溜息だけつくと、厨房でヨブ鹿のステーキに火を通す。

表面に火を通すと、ヨルクマトンのチーズをたっぷり肉の上のせ、オーブンで溶かすとその上から常時煮込んであるソースを掛けて、副菜を盛りつける。

ポタージュのスープとパンを添えてトレーに乗せると、カウンタ―で待つ少女にそれを振る舞った。

「……私、お金無いよ？」

「食べなさい」

ラナはエプロンで手を拭くと、シャモンとスタイアのエールのグラスを下げる。

鼻をつくチーズの芳醇な香りと、肉汁のはねる肉の濃厚な甘い匂い、もうもうと湯気を上げるポタージュの匂いが少女に空腹を思い出させる。

少女はラナとスタイアの顔を交互に見る。

スタイアはようやく少女に気がつき、小さく頷いて促した。

少女は何も言う暇も無く、かぶりつくようにフォークとナイフでステーキに挑みかかる。

獣のように食べる姿を見かねたラナが肉を切り分ける横で、スープの熱さに少女が咽せる。

思わず、笑ってしまいそうになるような味を堪能し、喉に押し込む度に腹の底に落ちる感覚を覚える。

皿を舐めて最後のソースの一滴まで食べ終えて、余韻に浸る少女だったが、やがて、思い出したかのように厳しい顔つきを取り戻し、カウンターから離れた。

「おや、もういくのかい？」

少女の様子に気がついたスタイアは酔いの回った瞳で少女を見つめた。

「うん」

少女はスタイアに向けて大きく頷くと鼻を鳴らす。

「ここにはもう来ない」

少女はきつぱりとそう言い切って口のすり切れた袋から金貨を手取る。

それを力一杯、スタイアに投げつけて未練無くドアを開けてグロウイドーンの街の中へ消えてしまった。

スタイアは受け取った金貨を指で弾くとポケットの中に仕舞う。

「スタさん。そいつぁ賄賂って奴じゃないのかい？」

シャモンは苦笑する。

「へっへ。いい仕事でしょう？」

スタイアはシャモンの冗談に乗って苦笑した。

「しかし、いいのかい？行かせちゃって」

「貧すれば鈍する。あの子は利口ですよ。ここに長く居たら、自分を支える物がなくなっちゃうってことに気がついたんでしょ」

「で、今の生活に逆戻りだ」

「さあ、どうですかね？あの様子じゃあ、何か思いついたみたいですし、そりゃあないんじゃないですかね？お腹いっぱいになつて少し休むと、どうにかいい考えつてのは浮かんでくるモンなんですよ」

「……見越して飯喰わせたのか」

「手を貸して甘えっぱなしになる人間は容赦なく切り捨てますよ僕は。とてもじゃないけど、他人の人生背負い込めると思える程、自惚れてはいませんから」

スタイアはそれだけ言うとかウンターを離れる。

「でも、いちおう、虫を飛ばしておきましたよ」

「……へえ、ユロの野郎が珍しく昼間に居ないと思ったらそういう理由かい」

ラナがスタイアの外套を手渡し、スタイアは手早く外套を羽織る。

「сойじゃま、夜遊びしてきま——」

そのまま店を出ようとしたところ、スタイアはドアを開けたところで誰かとぶつかる。

転びそうになったスタイアを支えたのは黒い僧衣を纏った偉丈夫だった。

「大丈夫か」

「おや、噂をすればなんとやら——ユロさんじゃないか」

浅黒い顔を戸惑いに彩る偉丈夫——ユロからは土の匂いと、僅かな腐臭がする。

シャモンは酔った眼を細め、ユロを見つめると、ユロは思わず目を逸らす。

「……墓堀が昼間から出歩くなんざ、珍しいと思っただよ」
「そういうときも、ある」

ユーロはぼそぼそとか細い声で応えると、カウンターに座った。

「つきとめた」

「あんだって？」

「ビリハム・バファ―伯爵が教会から預かった身よりの無い子供を貴族の間に奴隷として斡旋している」

シャモンは酔った頭で色々と考える。

ユーロは結論からまず話す癖があり、それがしばしば人の誤解を誘う。

それは本人も気にする悪癖だ。

「――奴隷制度は何年も前に廃止されてんだぞ」

「だが、おかしい」

「そりゃそうだ。律法で禁止されたことを律法を決めた貴族が破ってるのはおかしいことだわな」

「――売られていく人数と、集められた人数が違う」

そこでシャモンは眉を潜める。

スタイアは笑って応える。

「……奴隷を売買すること自体は問題じゃあないんですよ。そうしなければ生きていけない人だっている。シャモさん、僕らはそういう時代の人間だったでしょう？――だけど、問題は、その奴隷をどのように使っているかが問題なんですよ」

スタイアの目は笑っていなかった。

シャモンはひとしきり顎を撫でて考え、しばらくして大きな溜息をついた。

その瞳からはもう、酔いが消えていた。

「……今夜にも、鐘は鳴るかね？」
「鳴らしましょうかね」

第1章 『最も弱き者』 7

グロウリイドーンの東部には貴族街が広がる。

爵位を得た者達は治世の要職につき、この場所に邸宅を構えることを一つのステータスとしている。

政治の要となるヨッドヴァフ騎士団、聖フレジア教会、貴族院、枢機院といった建造物は全てこの東区画にあった。

少女は夜でも街灯が灯され、視界の効く町並みを小走りで歩き、一つの邸宅を見上げた。 ビリハム・オファー伯爵の邸宅である。

グロウリイドーンの建築当初に構えられた邸宅は高い外壁に囲まれた二階建ての石材で組まれた邸宅である。

少女は荘厳な門の前で、執務を終え邸宅に帰宅するビリハムを待ち受けることにした。

宵が深まる頃、邸宅に馬車が乗りつけ深緑のチュニツクに身を包んだビリハムは戻ってきた。

随伴する召使いが門の横に佇む少女を見つけ、怪訝な顔をする。

ビリハムも少女の思い詰めた表情を見て、怪訝な顔をしたが、すぐに用向きを尋ねた。

「この時分にいかが用件ですか？」

「……家を追い出されました。どこか、働かせてくれる場所を探しています」

ビリハムは少女を値踏みするように頭の前からつま先まで眺めると、召使いに小さく耳打ちすると寛容に頷いた。

「それであれば、力になれることもあるだろう。中に入って、ゆっくりと話を聞かせて欲しい」

少女は小さく頷き、ビリハムの後続き邸宅に招かれた。

外壁の内側には豪華な庭園が広がっており、家を取り囲むようにゲッケイの生け垣が広がり、庭木として植えられたスマラグが道の脇に並べられている。

シャンデリアのある広いホールを有した邸宅に入ると、ビリハムは少女を客室に招くように召使いに指示した。

召使いは僅かに頭を下げると少女の手を引き、地下室へ向かった。石壁で支えられた地下室はどこか冷たく、灯されたるうそくの明かりがぼんやりと揺れていた。

「あの、どこへ……」

召使いは何も応えず、少女の手を乱暴に引くと、地下室の一室へ乱暴に放り込んだ。

少女は冷たい石床に尻を打ち、小さく悲鳴を上げるが、召使いは冷たい眼差しを向けたまま扉を閉めた。

がちやりと鍵のかかる音がして、少女は地下室に取り残される。

「待つて！お願い！一つだけ教えて欲しい！」

地下室を立ち去ろうとした召使いの足音が止まる。

少女は扉に駆け寄り、精一杯の声を上げて尋ねる。

「恵雨の月の初めの頃に、金色の髪をしたあたしと同じくらいの子がここに来てるの！その子が今、どうなってるのか！それだけ！それだけでいいから教えて！」

召使いの靴が石床を叩く音が大きくなり、やがて扉の前で止まった。

「知っているのね？」

召使いはどこか冷めた声でそう尋ねた。

「……うん。多分、私も奴隷として売られる。それは、わかってる」

しばらくの間、召使いは沈黙していた。

「その子なら、よく覚えてる。体の弱い子だった。勤めに耐えられず、すぐに死ぬとわかっていたから誰も買わなかった」

「じゃあ！まだ、ここに居るの！？居るのね！？」

召使いは答えない。

少女はその沈黙に別の意味を受け取った。

「……うそ」

少女の頬にずっと、一筋の涙が差した。

震える喉が嗚咽を零しはじめ、膝が力を無くしはじめる。

今日まで少女を支えてきたものが、ふと目の前から無くなり、少女の肩に疲れがどっと押し寄せてきた。

自分を慕ってくれただけの少女で、何をしてくれた訳でもない。

辛くても、生きていく事を互いに誓った。

その少女の前では、彼女は強くなければならなかった。

だが、もう、そんな必要も無い。

そうなったとき、少女はただの少女に戻ってしまったのだ。

「扉の鍵は開けておくわ。落ち着いたら、逃げなさい」

召使いの声はどこか、疲れていた。

少女は疲れた中、ただ、どこかで触れたことのある良識だけで尋ねた。

「……どうして、そんなことしてくれるの？」

「私にはこんな生き方しかできませんから」

召使いはそれ以上、何も言うことなく足音を遠ざけた。

暗い石壁に囲まれた部屋で少女は体を横にしていた。

今まで張っていた緊張の糸が全てほぐれ、生きていく意味を無くした少女は最早、立ち上がる気力も無かった。

それでも覚える空腹に鬱陶しさを覚えながらも少女は冷たい石床に顔を擦りつけた。

振り返れば、空腹と痛みだけが自分を生かしてくれた。

名前も無く、ただ一度も満足に腹を満たしたこともなく、飢えと寒さに耐え、最後はこの地下室で病死したと考えると、とてもやりきれなかった。

かつて仲間だった者も、彼女から離れていった。

弱い者は淘汰される。

足も遅く、体も弱く、何一つ、彼らに貢献できなかった彼女は、生きる為に彼らの食事を減らさなければならぬことから切り捨てられた。

それは、受け入れなければならない現実であることは知っていた。彼らもまた、ただ一度だって満足に腹を満たしたことが無いからだ。

自分を慕い、自分のようになりたいとかつて言ってくれた少女を鬱陶しいと思ったことは何度もあった。

だが、無くして初めて、自分がその弱い少女に支えられて強くあったことがわかる。

人は自分の為に卑しくなれるが、貴くあるのはいつだって他人の為だ。

流れに、身を任せよう。

少女は諦めて身じろぎする。

「ごきげんよう」

ビリハム・バファアは穏やかな笑みで少女に声をかける。

少女は床に寝そべったまま、動かなかった。

「君は、いつぞや私が保護した少女の知り合いみたいだね」

少女は答えない。

ビリハムは続ける。

「どこまで知っているか知らないが、それはよくないことだ。人は誰しも秘密を持っている。秘密は誰にも知らされず、伏されているからこそ大切なのであって、それを吹聴してまわるのはとてもよくないことだ。もちろん、私は君がそのようなことをするような人間ではないと知っているし、信じている。だけど、わかつて欲しい人は誰しも臆病で、私も残念ながら臆病な人間なのだ。そこで、私は君とその秘密を、そう……なんといいたらいいのか、共有したい。お互いに秘密を持つのだ。そうすれば君は私の持っている秘密を深く知ることと私を信じてくれるし、私も真に君を信じることができる。その秘密は君の知っているあの子、そう、あの子だ。とても可憐な子だ。金色の豊かな髪をして、とても優しい眼差しをしている。あの子もまた、共有してくれたものだ。どうだろう？私とその秘密を共有してくれないだろうか？」

長々と喋るビリハムに、少女は僅かな違和感を覚えた。

「……生きてるの？」

「誰が、そのような悲しいことをいったのかわからない。メラージェンが言ったのであれば彼女にも、正しく、伝えねばならない。それは私が彼女を引き受け、彼女の生きる道を示さなければならぬ身分にあるが故の義務だ。だが、問題はそこじゃあない。君はひよっとして勘違いしているかもしれないが、そう、あくまで勘違いしているものと思って尋ねるが、その子が殺されて……いや、フレジアの光に祝福されたと思ってはいないかね？だとしたら、悲しい私は大いに悲しい。その誤解をどうか、私に解かせてくれはしないか？どうだろう？」

ビリハムの言葉には嘘は感じなかった。

だが、どこか狂気に触れた危険さを少女は既に感じていた。

少女はゆっくりと身を起こし、気だるげだが、それでもしっかりと応える。

「会わせて」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5915y/>

誰が為に、鐘は鳴る。

2011年11月23日15時45分発行